

## ※ 発掘調査の概要

### 石神遺跡の調査(飛鳥藤原第150次)

1981年から本格的に始まった石神遺跡の発掘は、前回の19回目の調査(飛鳥藤原第145次調査)において、ようやく阿倍山田道を確認しました。これによって石神遺跡南限から始まり、ひたすら北進を続けてきた長旅に一区切りがつきました。

過去の調査成果を振り返ると、2000年度、2001年度の調査では、石神遺跡の建物群の北限となる、東西方向に走る壙の柱穴列と石組溝を確認しています。今回の調査は、将来の石神遺跡の史跡指定を念頭に、この建物群の北限が東側へどのように伸びていくのかを明らかにすることを目的としています。10月1日、今度は東へ向かう旅路が始まりました。

今回の調査区の面積は約400m<sup>2</sup>、田んぼ2枚の中で東西に細長く、2区画(西区と東区)に分かれて発掘します。スタートとなる西区西側では、想定していた柱穴列と石組溝が早速顔をのぞかせ始めました。しかし、同時に石神の名にふさわしく、無数の小石や人頭大の石が一面に現れ、我々を悩ませています。微妙に斜行する石列や蛇行する石列もあり、どうやら想定外の石組溝がありそうです。

一方、東区ではすんなりと東西に横切る柱穴列が確認できました。しかし、想定北限ラインから北に約1mずれているのです。こちらも簡単には東進してくれません。

北限の遺構がどのように東へ続くのか、多くの石組溝には何が沈んでいるのか、悩みも楽しみも多く待っていそうです。

(都城発掘調査部 黒坂 貴裕)



斜行石組溝の発掘状況(南東から)

### 横大路南側溝の調査(飛鳥藤原第149-5次)

横大路は難波から藤原京、さらに東国へとつながる古代の東西幹線道路です。横大路は現代の道路と重なる部分が多いため、その発掘事例はまだ数例しかありません。今回の調査地は藤原京右京一条五坊にあたり、近鉄大和八木駅のすぐ南です。大和信用金庫八木支店の移転工事に伴うもので、北側に東西12m×南北9m、その南に東西4.5m×南北26mの調査区を設定しました。約70m西の奈良地方法務局建設の調査でも横大路南側溝を確認しており、その続々が期待されました。

調査を進めていくと、調査区北側で横大路南側溝を約10m分確認しました。ここから北が横大路ですが、後世の削平が激しいため、路面の様子はわかりません。調査でわかった重要な点は、横大路南側溝が2条存在することです。南側の溝は幅3m、深さ40cmで、北側の溝が幅1.5m、深さ20cmでした。遺構の重複関係と出土遺物の状況から、南側の溝が藤原宮期にあたり、北側の溝がそれよりも新しい藤原宮期末～奈良時代と判断されます。南側の溝からは、木片や土器片などが多数出土しており、墨書土器や硯、馬の歯も見つかりました。

南側溝のすぐ南には2条の細い溝がありますが、その南方には空閑地が広がっており、調査区南端で東西3間・南北2間以上の建物を検出しました。

今回の調査では、横大路南側溝を付け替えた可能性がある、という非常に大きな発見があり、坪内の状況についても手がかりが得られました。今後の調査・研究により、横大路とその周辺のさらなる解明が期待されます。

(都城発掘調査部 番 光)



横大路南側溝(西から)